

「2017年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール参加報告書」

京都大学総合人間学部1年 齊藤喬

私がこのプログラムに参加しようと思ったのは、現在急成長しているベトナムの現実を自分の目で見たいと思ったからだ。私は実際にベトナムに行き、自分の目で見て感じる事ができた。ベトナムでは、インフラ整備が遅れているために電線が整備されていなかったり、道路が陥没したまま放置されていたり、屋台でも調理過程や食器洗浄過程に不衛生な点があったりしたところの一部があった。このような、日本に住んでいる者から見ると、驚くような状況が他にもいくつかあった。バイクの量は非常に多くて渋滞が多々あり、バイクの路上駐車は当たり前で、法律を守っていないであろう運転者も多いという状況だった。また、物乞いをする人やごみ箱をあさって使えるものを探している人も目にした。もちろん、ベトナムで見たのはマイナス面だけでなく、むしろそれよりも多く、ベトナムの素晴らしい面を見た。ベトナムの人はとても明るく、外国人である私たちに対して常に笑顔で、そしてとても優しく接してくれた。日本では食べたことのないような食材を食べることができ、ベトナム料理もとてもおいしかった。しかし、上に述べたような今のベトナムのマイナス面は注目すべきであり、近年の急速な発展による弊害の例だと思われる。私は、国が発展していくこと自体は悪いこととは思わないが、それによる弊害の大きさに驚いたのである。路上でものを売っている人を見ると、本当に生活していくことが可能なのだろうかと思うことがあった。日本や多くの先進諸国は、国の経済が発展することは良いことだと当たり前のよう感じている。私は、果たして本当にそうなのだろうか疑問に思った。どうすべきなのかという明確な答えはわからないが、少なくとも、発展には良い側面だけではないということ、実際に自分の目でベトナムを見て強く感じるようになった。そして、このような、国の発展を取り巻く事柄に興味を持った。今後、他の国に行く機会があれば、国の発展の両側面に注目して観察したいと思った。

プログラムの内容は、日本語授業への参加、ベトナム語講座、ベトナムの社会についての特別講義の受講、現地学生との共同発表や、チャンアン、およびドゥンラム村への学外研修であった。ベトナム語講座では、たくさんベトナム語を使って会話することができた。一番心に残っているのは、日本語の授業で日本語を勉強している学生と一緒に授業に参加して交流したことである。海外の大学の授業に参加するというのは初めての経験で、純粋にとっても楽しかった。ベトナムの学生からは、日本の大学とは比べ物にならないような元気とやる気を感じた。全員が大きな声で音読し、できるだけたくさん日本語を話そうとし、自習をしている学生も中にはいた。彼女たちの日本語学習への熱心さには驚き、日本語を話せるということが将来の生活においてどれだけ有利なのか、というベトナム社会の常識を身にしみて感じた。たわいもない話から、ベトナムの学生の視点から見た今の社会についての考えや、将来の夢などの話もたくさん聞くことができた。日本から来た私のことを非常に喜んで暖かく迎え入れてくれて、とてもうれしかった。将来、彼女たちの多くは日本に留学に来たいと言っていた。今後も彼女たちと交流を続けたいと思っている。

反省点として、もう少しベトナム語を話せるように勉強してから行くべきであったという点があげられる。当初は、現地の学生とベトナム語で会話したいと思っていた。しかし、実際はベトナム語で会話することができず、自分の知っている少しの文法や文章を一方向的に相手に言うのがやっとなであり、ベトナム語で会話することは出来なかった。そのため、現地で交流する学生のほぼ全員が日本語を学習していることもあり、主に日本語で会話することとなった。マーケットに買い物に行っても、店員さんは笑顔でベトナム語で話しかけてくれるが、数字しか聞き取ることができず、何を言っているのか理解できなかった。だから、もっとベトナム語を勉強してからベトナムに行けば、もっと会話ができ新たな発見もあったと思う。この点は、今後、海外へ行くときの反省点としたい。

将来について、私は国際政治学を学びたいと思っている。今の段階では、将来の研究にどう役立つかは具体的にはわからない。しかし、国の発展という観点に興味を持ったため、このトピックについてもっと深く考察していきたいと思った。

私は日本という眼鏡をかけて、海外の他の国を見てしまっていることが多いと思う。その際の基準は、今の自分の生活であり、今の自分が持っている考え方である。しかし、そのような見方では、本当の正しい世界を見ることができず、その社会や国について意味のある議論をすることができないと思う。今回、現地に行き実際に現場を見ることで新たな視点を持つことができ、自分の視野が広がることを実感した。自分の目で見て確かめるということは何においても必要だと強く感じ、気づくことができた。